

とある年夏。八月十八日、水曜日、十八時ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は晴れ。気温は二十五度程度。

場所は、市内のある高級住宅地。

その外にある『鹿島 智絵里（かしま ちえり）』の自宅・自室だ。

この時間帯、智絵里の部屋は、外よりも暑くなる。

西日によつて部屋全体がオレンジ色に染まり、それは美しい光景になるものの、気温も  
上がるからだ。

だから主人公と智絵里はしっかりと冷房を入れて、抱き合つたまま、ベッドと一緒に寝  
転がつていた。

そんな二人は、あの後家の中に入つてシャワーを浴び、その最中にもセックスした。  
例のごとく智絵里が誘惑してくれば、主人公はなすすべもない。

花に吸い寄せられる虫のごとく選択肢を失つて、智絵里の底なしの欲望にのまれるだけだ。

それは智絵里の部屋に戻つてからも続き、智絵里のベッドでも、主人公は智絵里を犯した。

ほとんど毎日のように会つていて、会えば必ずと言つていいほど交わるのに、自分達はまるで飽きない。

それどころか、ますますのめり込んでいく。

だから、いつか、どうにかなつてしまいそうで怖い。

だがそれでも、やがて限界は訪れる。

もはや今日何回目もわからないセックスが終わる頃には、智絵里は力尽きて眠つてしまい、主人公もそれにならつて添い寝しているうち、この時刻になつた。

ところで智絵里は、この部屋に入つた瞬間からずっと主人公に密着したままで、今もまるで離れる気がないようだ。

ベッドに座ればわざとらしく手を内腿の間に導いて誘つてきたし、行為が始まれば両手両足をしつかり絡めて、決して逃がすまいと必死でしがみついてきた。

先ほど目を覚ましてからも、ずっとそんな感じだ。

横になつたらなつたで、今度は主人公の胸に頭を押し付けてくるし、時折、すんすん、

と主人公の匂いをかいだり、主人公の胸に耳を押し付けて心臓の音を聞いたりしては、満足げにくすくすと笑っている。

このように、セツクスした後の智絵里は、憑き物が落ちたかのように、とにかく素直でおとなしい。

そんな智絵里にたっぷりと甘えられて、主人公は身も心もとろけそうだった。この時がいつまでも続けばいい。本気でそう思った。

だけど、そうはいかない。

もう少ししたら、夕食の時刻だ。

そうなつたら二人は主人公の家に移動して、主人公の母親とともに食事をするのがお決まりの流れだ。

その後、智絵里の両親のどちらかが迎えにくるまでは、二人は一緒に過ごせるだろう。でも、眠る時は別々だ。

たとえ主人公がこのまま毎晩、毎朝智絵里のそばにいたいと思っていても、それはできない。

自分達は、誰にも恋人同士だと認識されていないのだから。

そんな事を考えていると、ふと智絵里と目が合つた。

すると智絵里はそれが当たり前のように目を閉じて顔を寄せ、キスをせがむ。応えているうちに、別れの時刻が近づいてくる。

SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0～5秒ほど流してセリフ】

【その後、ごく小さな音でトラック終了まで流し続ける】

【部屋の外の音を、部屋の中から聞いている】

「【※4回※ キスする。

唇を重ねるだけだが、露骨な音を立ててする、甘々なキス】

ん……ちゅつ。

ちゅつ……。ちゅ♥」

智絵里、唇を離すと、主人公を嬉しそうに見つめながら尋ねる。

「【くすくすと嬉しそうに尋ねる。

だが『自分はもちろん把握しているが、主人公はきっと覚えていないだろう』と思つて  
いる』

ねえ。今日自分が何回イツたか覚えてる?』

〈主人公〉

「えつ? うーん……。ちょっと自信ない……」

主人公、それなりに努力はするものの、結局回答できずに負けを認める。

智絵里は頻繁にこれを聞いたがるのだが、主人公は答えられたためしがない。

今日こそは覚えていようとしても、結局忘れてしまうのである。

行為中は極端に思考能力が下がるというか、複雑な事を覚えていられなくなるような気がする。

特に、三より多い数を数える事は難しい。

したがつて、いつもあいまいな記憶しかないのだつた。

「くすくすと嬉しそうに尋ねる。

『きつとこちらなら、確実に答えられるだろう』と思つて  
じゃあ、私がイツた回数は?』

〈主人公〉

「六回？」

それでも、こちらには自信がある。

主人公がもつとも気を付けている分野だからだ。

自信がありすぎるというのも気恥ずかしいが、事実あるのだから、仕方なかつた。

「露骨に声が弾む。ものすごく嬉しい。ものすごく機嫌が良くなる。  
予想が的中したので】

うわ。そつちは覚えてるんだ。怖（こわ）♥

〈主人公〉

「だつて、ちいの事だし……」

もごもごと歯切れの悪い返事さえ、今の智絵里には快いようだ。  
満足げに目を細めると、きやつきやと笑い始める。

「すごく幸せな気分。

主人公に愛されている実感がわいたので。

『やり倒す』とは『昼から夕方の間、ずっとセックスしていた』という意味】

ふふふふ。 今日もやり倒しちゃったね。

【嬉しそうに。 愉快で仕方がない。

真面目に勉強していたと思つて いるだろう両親や周囲の人の事を思うと、笑つてしまふ】

全然勉強してない。 ふふふふ♥】

〈主人公〉

「もう……」

主人公、『そんな事を得意げに言うものじやない』とたしなめたくなるが、『どの口が言  
うのか』という話である。

よつて、苦笑するほかない。

「前々から思つていた事を切り出す。

しかし本人としては『ふと思いついた風に』話している。

『これだけセックスしていたら、そのうち、何かの拍子で二人の身体が一つに融合して

しまう事はないだろうか。そうなつたら、とても素敵なのに』と言いたい  
ねえ。こんだけしてたらさあ。

そのうちくつついて一つにならないかなあ』

『主人公』

『え?』

するとここで、智絵里が不思議な事を言い出した。

主人公はその意図が理解できないながらも、ひとまず続きを促してみる。

『ぱつぱつと、ゆつくりと語る。

とある作品について話している。

それは、仲の良すぎる二人が、ある日抱き合つた瞬間、一つに融合してしまうというものだつた。

その融合は、作中では『トラブル』として描かれた。

二人は元の姿に戻りたいと願い、最終的にそれが叶つた事で物語が終了した、  
だけど智絵里はその作品を読んだ時『こんな風に主人公と一つになれたたら、どんなに素敵だろう』という感想を抱いたのである』

そういうお話、あつたじやん。

仲良すぎて、一つになつちやうつてお話。  
私あれに憧れてたの。

【少しだけ声のトーンが下がる。少し切なげに】

そしたらもう、淋しくないのに。ずっと一緒にいられるのにつて……】

〈主人公〉

「ちい……」

智絵里が何を言いたいのかは、もう、痛いほどわかった。  
だからたまらなくなつて、主人公はそつと顔を寄せる。

それを待つていたかのように、智絵里が目を閉じる。

【※1回※ キスされる。

不意打ちの、あまり音がしないキス】

ん♥

〈主人公〉

「大丈夫だよ。居るよ。何があっても居る。

わたしはずつと、智絵里のそばにいるからね」

主人公、智絵里の言葉に、真剣に応える。

心からの想いを告げたところで、自分が頼りない事はわかっている。

主人公はまだただの学生で、家族の助けなしでは、将来を決める事すらできないほど弱いだからだ。

それでも、選びたい道は一つだ。

たとえ自分がどれだけ無力でも、逆にある日突然、万能な存在になれたとしても。自分は必ず智絵里の事が好きだし、どれだけ他の優れたものをちらつかされても、智絵里以外を選ぶ事はない。

それだけは伝えたかった。

「くすくすと嬉しそうに。

『主人公なら、必ずそう言つてくれるだろう』と思つていたので。

しかし、今はそう本気で思つてくれていても、将来どうなるかはわからない。なので、声は笑つているものの、しつこくたずねる】

※あまり早口にならないようにお願ひします

何？ 居てくれんの？  
ずっと？ ほんとにずっと一緒？  
ほんとにー？』

〈主人公〉

「本当だよ。信じてくれる？」

「ものすごく嬉しそうに。

『え♥ もちろん信じるよ♥』と言つて いるのと同じ 声音で言う  
え♥ 信じない♥

【『ロリコンであるかどうか』と『人として信用できるか否か』は、あまり関係がない。  
しかし、今は何でもいいので主人公に意地悪を言いたい】  
ロリコンの言う事は信じない♥】

〈主人公〉

「えー……？」

果たして智絵里は今、どの程度主人公を信じてくれて いるのだろう。

主人公さえ、主人公を信じきれない。そんな中、智絵里はどう思っているのだろう。素直なのか、あまのじやくなのかわからない智絵里の事だ。

『信じない』という言葉が本心だとは限らない。

逆に、こうして笑いごとにしているのは、この先を悲観してのものなかもしれなかつた。

このように主人公が判断しかねていると、よほど心細そうな顔をしていたのだろう。智絵里が再び話し出す。

「何気なく話しているようだが、本気。

つまり『主人公に、自分が死んでしまうまでずっとそばにいてほしい』と言っている証明したかつたらさあ……ほんとにずっと居て。

私がおばあちゃんになつて。

『もうすぐ死ぬ』って時にも居てくれたら。

その時に『ああ。本当だつたんだなあ』って信じるから

『ね?』と言うように、智絵里が見上げてくる。

言葉にするまでもない。

主人公は頷き、智絵里の手を握る。

たとえ未来が見えなくても、今の気持ちを伝える事だけはしたいと思つた。

〈主人公〉

「……わかつた。居るよ。智絵里が死んじやう瞬間まで、ちゃんとそばにいる」

SE2 智絵里がベッドの上で動く音

【最初から最後まで流す】

「真剣に、ゆっくりと。

何度もしつこく念を押す。絶対にそうして欲しいので】

約束だよ？

約束。

絶対約束。ね？」

〈主人公〉

「……うん。約束」

夕日に染まつた部屋で、主人公の影が動く。

実体よりもずっと大きく黒いそれは、どこか不格好で気味が悪い。

『これこそがお前の本性だ』と言われば、自分は反論できないだろう。主人公はそう思つた。

それでも智絵里が信じてくれるなら、このような自分も、いつか別の何かに生まれ変われるかもしれない。

そんな夢い望みだけが、今の主人公を支えている。

〈主人公〉

「……智絵里は可愛いね」

主人公、ぽつりとそうこぼすと、智絵里の額にキスをする。

そのまま唇に移行し、今日何度も目かわからぬ口づけを交わす。

「※3回※ キスする。

唇を重ねるだけだが、露骨な音を立ててする、甘々なキス】

ん♥ ふ♥ んつ……♥

【嬉しくて笑う。

主人公がたくさんキスしてくれたので】

ふふふふふ♥』

暗い影に覆われたまま、智絵里が笑う。

この場所、この時間こそが夢見た場所であるかのように、主人公を受け入れる。一緒に汚れてくれと泣いたくせに、今も憎らしいほど無垢で、ためらいもなく全てを捧げてくれる女の子。

もし叶うのなら、主人公はそんな智絵里と、このまま最後の日まで一緒にいたい。最後までちゃんと約束を守って『この人は嘘をつかなかつた』と、『本当に自分のそばにいた』と知つてほしい。

そうなるまでには、あと、どれだけの事を乗り越えればいいのだろう。そうするうちに、いつか自分が許される日も来るのだろうか。考えても答えは出ない。

だけど確実に時は過ぎて、二人は今日も誰にも言えない関係のまま、一日を終える。それだけがただ決まつている、真夏のある日の事だつた。

「少しだけ声のトーンが下がる。少し切なげに】

好きだよ。お姉ちゃん。ずっと私のそばにいて。

どこにも行かないでね……。

【※1回※ キスする。

智絵里から顔を寄せてキスするイメージ】

ちゅつ

ここでフェードアウトして終了。